

自己破産宣告から圧倒的勝利へ

【聖書箇所】 7章 7～25節

はじめに

●前回は、6章 14節のみことばの持つ意味を探りました。「あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にある」というこの偉大なる宣言、感謝をもって大胆に宣言したいものです。このみことばが私たちの現実となるために、パウロは7章を費やしています。それは私たちにとって慰めです。なぜなら、パウロ自身がその宣言を自分の経験とする過程においてぶつかった問題にふれているからです。

●律法とは何でしょうか。律法とは私たちが神のために何かをすることを意味します。一方の恵みとは何でしょうか。恵みとは神が私たちのために一方的に何かをしてくださることを意味します。ですから、律法の下にはないということは、私たちが自分の力で神のために何かをするように全く要求されていないということです。反対に、恵みの下にあるとは、自分の力に頼らず、神が私たちに与えて下さるすべての力によって、すべてのことをなすことができる、勝利の歩みをするということかできるということを教えようとしています。だとしたら、律法は何のためにあるのでしょうか。今回は、その律法の本質とその働きが何かということについて学びたいと思います。

1. 律法の本質とその働き(7～13節)

●ヒューマニズム(人本主義)は、人間は本来良い者であり、人間の内には善があり、善いことをすることができるという考え方です。ところが、聖書はそれとは反対です。私たち人間は例外なく墮落しきったものであることを教えています。しかしそのことを初めから知っている人は誰もいません。自分が罪人であり、何が善であり、何が悪であるのか、それを教えるのは神の律法だということです。パウロは7節で、「律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。」と述べています。

●だれでも幼いときは律法なしに生きています。幼児は本能的に生きていて、何でも思いつくままに行動します。お腹が空けば時間に関係なく泣いてお乳を欲しがります。夜であろうと、昼であろうと、親の都合に関係なく欲しがります。そしてお腹がいっぱいになると寝てしまいます。予告なしにうんちをします。泣き疲れるとすぐに寝てしまいます。幼児は律法というものを持っていません。しかし少し大きくなると、親の「～しては、いけません」という声を聞くようになります。このときから子どもは新たな段階に入っていきます。第一次反抗期です。

●子どもは、して良いことと、してはならないことがあることを次第に知るようになります。ところが、親の言うことがいくら正しいことであっても、子どもはそれに対して反抗しようとしています。親の戒めの声を通して、子どもの中から悪い性質が、つまりもともとあった罪の性質が明るみに出されてくるのです。

律法によって人は自分の罪深さを知るようになるのです。

●イエシュアは神の律法を二つに要約しました。一つは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」。もう一つは「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」です。ところで、この律法を私たちがいざ守ろうとすると、この律法を行なうことを阻むものがあることに気づくのです。律法は「～してはなりません」ということだけでなく、積極的に「～をしなさい」とも指示します。たとえば、「愛しなさい」「赦しなさい」「与えなさい」「ささげなさい」「祈りなさい」「信頼しなさい」と命じます。そうした命令が語られれば語られるほど、それに反抗し、逆らおうとする心があるのを見出すのです。皆さんはどうでしょうか。「赦しなさい」と言われれば言われるほど、「赦せない」自分、愛のない自分を発見するのではないのでしょうか。子どもが親から「勉強しなさい」と言われれば言われるほど、勉強できなくなるというのと同じです。「私は、かつては律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。」(7:9)とパウロは告白しています。

●鏡は私たちの顔が汚れていれば、その汚れた顔をそのまま映し出します。だからといってその鏡が悪いということにはなりません。良い鏡なのです。鏡に向かって、「鏡よ、鏡。この世で一番きれいな者はだれ?」と尋ねたお妃に対して、「この世で一番きれいな方は、白雪姫です。」と答えた鏡は、お妃の逆鱗にふれて壊されてしまいます。鏡は本当のことを言っただけなのに。

●律法が悪いわけではありません。人間が悪いのです。このように律法は私たちの真相を、私たち人間の本当の姿をありのままに映し出す鏡のようなものです。「愛しなさい。赦しなさい。・・・」ということによって、神の律法は私たちの罪の病を認識させるのです。自我を示し、自己中心性を明らかに映し出すのです。ですから、律法によらなければ、私たちは自分の本当の姿を知ることはできないのです。ところが、律法は私たちの真相を明らかにしますが、それに打ち勝たせる力までは与えることができないのです。そこに律法の限界があります。律法によって人は自分の罪深さを知ることができますが、律法には人を救う力はないということ、「いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが分かった」とパウロは述べているのです(7:10)。本来、「律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」(12 節)。そうした神の教えを実行できるなら、なんとすばらしいことでしょうか。美しい神との関係や人との関係も造ることができますが、律法それ自体にはその力がないのです。

●律法の本当の役割は、第一に、鏡のように罪に汚れた私たちの状態を示すことです。そして第二に、そのことを通して、真の救いを与えるイエス・キリストへと導く「養育係」なのです。ですから、教会は律法を正しく語らなければなりません。私たち人間のあるべき姿を語らなければならないのです。なぜなら、そのことによって私たちはキリストに導かれるからです。私たちが救いにあずかるときにも、そのことは重要です。なぜなら、自分の罪が認識されないと救いもはっきりしないからです。

2. 自己破産した人間(14～24 節)

●そのようにして人はキリストを必要とし、キリストによってはじめて「新しく造られた者」となるのです。罪を赦され、神の子どもとなり、その特権にあずかった新しい人です。ところが、この新しい人であるキリスト者が神のみこころにかなった生活を始めようとするやいなや、必ず失敗へと導かれるのです。

●14～25 節には「私」ということばが何回出てくるでしょうか。22 回。この「私」とはキリストを救い主と信じた「私」を指しています。生まれ変わった信者が心から神に従ってみこころを行ないたいと望むのですが、実は、自分にはできないのです。ですから、自分の心の中で引き裂かれているようで、悩むようになるのです。24 節でパウロは自己破産宣告をしています。「私はほんとうにみじめな人間です。・・・」

●このほど U 市にある炭鉱が閉山に追い込まれました(1994 年)。閉山宣言するまでに、かなりの無理を重ねたらしく、その会社が持っている財産を抵当に借りられるだけの借金をし、二進も三進もいかなくなって、追い込まれての自己破産宣告となりました。ですから、退職に相応するだけのお金も出せないという状態に陥りました。そこで働く方々にとっては本当にお気の毒です。会社がもっと早くに自己破産宣告をしていれば、深負いせずに済んだと思われそうですが、自分たちの経営努力でなんとかなるという考えがますます深刻な状況を招いたと言えます。まさに、「だれがこの事態から救い出してくれるのでしょうか」という叫びが聞こえてくる感じがします。経営者側も、働く者側も、それぞれにこれではだめだという自己破産宣告をするなら、新たな道がもっと早い段階で開かれたかもしれませんが、お互いに自分たちの努力で何とかしようという思いがますます事態を深刻化させたのかもしれませんが、霊的な世界においても、救われた者がもしも、自分の力で、自分の努力で、また生まれながらの才能や頑張りの精神で主のみこころを行なおうとするなら、同様の深刻な結果を招くのです。

●神の律法の存在目的は、単に私たちの罪を認識させ、救い主であるキリストを受け入れる必要を示すだけではありません。救われた後でも、律法は私たちを完全な自己破産へと導き、追い込み、やがては御霊の完全な支配のもとに至らせること、それが律法の働きの目指すところなのです。もしキリスト者が自分の努力によって神のみこころを行なおうとするなら、ジレンマを経験することをパウロは自分の体験から述べているのです。

【新改訳改訂第 3 版】ローマ人への手紙 7 章 15 節、19～20 節

15 私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。

19 私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。

20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。

●ここで使われている「罪」は単数形で、ギリシア語の「ハマルティア」(ἁμαρτία)です。つまり「原罪」(original sin)です。その罪の力が戦いをいどみ、私をとりこにしているのだと言っています。罪の原理、悪の原理、それが私のうちに宿っている。原理・原則ですから、罪や悪の行動がどんどん内から出

てくるのです。しかし一方では神に従おうという思いがあり、この二つのものが葛藤をもたらし、彼を苦しめているのです。これはパウロのみならず、キリスト者であるならだれでも経験することなのです。

●ここで道が分かれるのです。一つの道は、「こんな苦しいジレンマがあるなら、信仰の道を捨ててしまおう」という道。もうひとつの道は、「私はほんとうにみじめな人間です。だれがこの・・・私を救い出してくれるのでしょうか」と自己破産宣告をして、神を仰いで本当の勝利を手にする道です。いずれかです。あなたはどちらの道を行こうとしているのでしょうか。

3. 自己破産から勝利の道へ

●自己破産宣告をするということは、決して敗北ではなく、勝利に通ずる道なのです。聖書に登場する神に用いられた人物は決まってみな自己破産宣告をしています。たとえば、アブラハムは「私はちりや灰にすぎませんが」(創世記 8:27)と言いながら、ソドムの町のためにとりなしています。「私はちりや灰にすぎませんが」というのはアブラハムが自己破産宣告を経験しているからです。アブラハムは神の約束を自分の力と画策で実現しようと、女奴隷ハガルによって子を得ようとしてしました。その結果イシュマエルが生まれましたが、神が約束した子孫は神が与えた子でなければなりません。この画策によって神は14年間アブラハムに現われることがなかったのです。ところが、その14年目にして主ご自身の方からこう言われたのです。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前を歩み、全き者であれ。」(創世記 17:1)と。「全能の神」として神がご自身を啓示されたのは、一度約束したことは必ず実現する神であること、たとえばそれが人間的には不可能と思われるようなことであっても、ひとたび神が口に出され、約束された事に対しては、どんなことがあっても神が実現に至らせる方だということです。その神にひたすら信頼せよ、というのが「全き者であれ」という意味です。つまり、**信頼における完全さ**の要求です。アブラハムはこの経験によってただただ神に頼って行くことを決心するのです。アブラハムはその信仰によって、やがてイサクが与えられ、神にあって「笑う」人生を手にしたのです。

●預言者イザヤも「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるのけがれた者で・・・」(イザヤ 6:5)と自己破産宣告をしています。それまでは預言者として神の民に律法を語り、断罪したイザヤが、あるとき聖なる神の臨在にふれたとき、やはり彼も自己破産宣告をしました。神から「くちびるの汚れた」自分の二重人格性を突かれたのかもしれませんが、自分が正しいと自らを支えていた自負は、みごとに砕かれました。そのとき聖書は「聖所の敷居が震い動き」(6:4)と記しています。これは実際に地震が起きたのかも知れませんが、同時に、イザヤ自身のファンデーション・ショック、つまり自己の存在を根底から揺さぶり動かされた経験であったことは間違いありません。

●私たちは、しばしば恵まれるということをやや容易に求めやすい者です。恵まれる説教、恵まれる教会、恵まれる本、恵まれる交わり・・・などなど。しかし自分が否定され、自己の存在が根底からゆすぶられることなしに、本当の恵みというものがあるのでしょうか。単に、感情的高揚をもって恵まれたというのは危

ないのです。

●神と言い争ったヨブが、最後に「今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いています」(ヨブ 42:5~6)と同じく自己破産宣言をしています。パウロもイザヤもヨブも同様に、自己破産宣言をしているのです。悲しむべきことは、多くのキリスト者がこのような自己破産宣言へと導かれていないということです。未だに自分の力でなんとかかなると思い、自分の力で主に仕えようと努力しているので、主が働かれる通路が開かれないうままにいるということです。

●今回のタイトルである「自己破産宣言から圧倒的勝利へ」は、「いのちの御霊の原理」に基づく勝利です。これについては次回に触れることにします。キリスト者としてのあるべき姿にほど遠い自分の姿を素直に認め、どんなに自分で繕おうとしてもそれは不可能であることを認め、自己破産宣言を神の前でする者となりましょう。そして、これまで自分のみじめさに悩み続けながら、いつしか、キリスト者といえどもこんなものだと諦めるようになってしまっていることを悔い改めましょう。なぜなら、神が私たちに備えて下さった救いとはそのようなものではないからです。イエシュアはみじめな生活をさせるためではなく、私たちがキリストにあって、「圧倒的な勝利者」とするためです。今回、そのことを、信仰をもって受けとめ、パウロと同じように、こう宣言しましょう。

【新改訳改訂第3版】 ローマ書 7章 25節、8章 2, 3, 4節 —抜粋—

7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

8:2 なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

8:3 肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださしました。

8:4 それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。

1995.1.29